国境を越えて、思い込みを超えて

神戸町立神戸中学校２年　横山直紀

みなさんは「外国の人」に対して、どんなイメージをもっていますか？

僕たち日本人よりも、自分からいろいろなことに積極的に向かえることや、誰とでも気を遣わずに話せることなど、良いイメージをもっている人が多いと思います。一方で、強そうで近寄りがたいとか、物を片付けることが苦手だとか、そんなイメージが浮かぶ人もいるでしょう。

僕自身も子どもの頃、外国の人が怖いと思っていたことがありました。なぜなら、体格が僕たちよりも大きく、自分たちと見た目も違うように感じていたからです。そう感じていたからこそ、父が「実は、仕事の都合で海外に住むことになったんだ。」と言ったとき、日本以外の国で、関わったこともない外国の人と一緒に生活することが、僕にはとても心配だったことを覚えています。

実際に住むことになったブラジルに入国したときも、不安でいっぱいでした。見慣れない外国の人の中、言葉も通じず、周りの人がみんな怖そうに見えていました。

そんなある日のこと、僕はアパートにある遊具で、１人で遊んでいました。いつもだったら一緒に遊んでいる兄が、そのときは用事があって遊べず、寂しさを感じながら１人で遊んでいたのです。そのとき、同年代くらいの男の子が三人、僕に向かって何かを話しかけてきました。言葉は分からなかったけれど、彼らは一生懸命ジェスチャーをしながら、おそらく、「一緒に遊ぶ？」とメッセージを送ってくれていたのでしょう。そして僕は一緒になって、彼らとサッカーをしました。遊んでいる間も現地の言葉が分からないので、何も話しかけることはできませんでした。でも、言葉は伝わらなくても、笑ったり、一緒に動いたりすることで、僕は十分に楽しい時間を過ごすことができました。

家に帰る時間が来て、僕はその子たちとの遊びをやめて、お別れをしました。寂しさはありませんでした。それよりも、外国から来た僕に声をかけてくれて嬉しかった気持ちと、また次に会いたいという気持ちでいっぱいでした。

結局その子たちとはそれからも会うことができ、親どうしも仲良くなりました。誕生パーティーに誘ってもらったり、同じ習い事をするようになったりして、本当に良い友達になれました。あとで親を通じて聞いたら、そのとき１人でいた僕を見て、寂しそうだと思って声をかけてくれたそうです。そして、日本人に対して、周りの人を大切にするイメージをもっていたことも、話しかけた理由の一つだったそうです。思い返すと他の人も、僕たちが日本人だからということで親切にしてくれたことが何度かありました。

しかしそんな中、辛い思いをしたこともあったのです。それは、帰国する直前に家を出て、ホテルにいたときのことでした。エレベーターで一緒になったある人が、私たちに向かって、こんな言葉をかけてきました。

「コロナは、おまえ達の国から来たんだ。」

当時ブラジルでは、コロナウイルスが恐ろしい勢いで流行っていて、世界でも五位に入るほどの死者が出ていました。これを聞いたとき、僕は何とも言えない気持ちになりました。もしかしたら、その人の家族が辛い目にあったのかもしれない。それでも、すごく悲しい気持ちになりました。そして「国や地域」を対象とした偏見や差別は、僕たちの周りにもあるのだと気づきました。

その出来事を経験して、僕は、自分自身のことを振り返ってみました。僕は「日本人」「アジアの人」とまとめて見られることで、良い思いも辛い思いもしたけれど、　僕だって、これまで「外国の人だから」という見方をしてこなかったかな、と考えたのです。最初にも述べたように、ある国の人を捉えて、「態度が悪い」「ルールを守らない」と思っていたこともあったし、そういう声を周りの人から聞いても疑問に思わずに過ごしたりしてきたのです。だけど本当は一人一人が違う人で、少なくとも僕が接したほとんどの外国の人は、僕や僕の家族に優しくしてくれていたし、きっとほかの人もそうなのだと思います。

だから僕は、国や地域でその人たちを決めつけて見るのではなく、一人一人の考え方や性格を尊重するべきだと思います。そうすれば、もっと相手のことを知り、間違った決めつけや差別で悲しむ人が減るはずです。

僕自身も、これから出会うたくさんの人に対して国や地域を理由に思い込みをするのではなく、たくさん話をすることで、その相手を理解していきたいと思います。もしもそんな思いが広がれば、国どうしが傷つけ合うような悲しい出来事もなくなるでしょう。

国境を越えて、思い込みを超えて、そんな世界になることを、僕は願っています。